生活・文化 21

古墳時代の土器転用カマド

http://www.kyoto-arc.or.jp
（公財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

写真１　カマド 122（東から）

写真２　カマド 116（西から）

はじめに　煮炊きに使われる造り付けのカマド（以下、カマドとする）は、古墳時代に朝鮮半島から日本列島に伝わったとされています。それ以前は竪穴住居の中心付近に設けられた炉で煮炊きを行なっていましたが、カマドは熱効率が良く、炉と比べて少ない燃料で強い火力を得ることができました。また、カマドは竪穴住居の壁際につくられたため、中央にある炉よりも生活空間を広く確保できるという利点もあり、日本列島で広く普及しました。

京都盆地では、おおよそ５世紀代になって竪穴住居内にカマドがつくられはじめます。盆地西部に位置する西京極遺跡では、５世紀後葉にカマドが出現しますが、その中に土器を転用してカマドの構築材とした例がみられます。転用された土器の器種や使い方は様々で、古代のカマドのつくり方を知る上で興味深い資料です。

土器転用カマドの事例　2013 年度に西京極遺跡で実施した調査では、古墳時代の竪穴住居８棟を検出し（図１）、その中の４棟でカマドが見つかりました。そのうち２棟の土器転用カマドの事例を紹介します。なお、調査で見つかるカマドの多くは、天井部が押しつぶされている、もしくは削られているため平面形がU字形をしています。そのU字形の開く個所にあたる、カマドに燃料を入れて火を焚きつける部分を「焚口」、天井部を左右から支える部分を「袖部」と呼んでいます。

竪穴住居 81 内のカマド 122（写真１）は、２個体の土師器長胴甕が焚口をふさぐように横倒しの状態で見つかりました。当初は、カマドが使われなくなった後に儀礼的に置

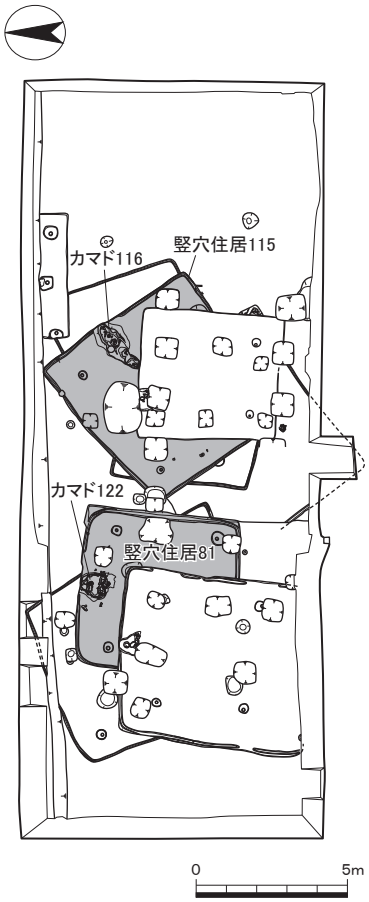

図１　西京極遺跡調査平面図
（５世紀中葉から８世紀中葉）
（１：250）

かれたものと考えました。しかし、土層をよく観察すると、甕はカマドの天井土と一体となってひしゃげていることから、後に置かれたものではなく、カマドの天井構築材として使用されていたものであることがわかりました。また、甕を取り上げてみたところ、一方の甕はほぼ完形、もうひとつの甕は体部下半のみで、底部が完形の甕の口縁部に差し込まれた状態であったこともわかりました。また、中央部からは土師器高杯が倒立した状態で、袖部からは変成岩の一種であるホルンフェルスの板状石材が立った状態で出土しました。

もう一つ、竪穴住居 115 内のカマド 116（写真２）では、西側の袖部から土師器長胴甕の下半部が直立して埋まった状態で、東側の袖部からは板状石材が立った状態で出土しました。中央部からは棒状の砂岩が立った状態で出土しており、その上に土師器甕を被せていました。

土器転用カマド構築方法　調査の結果をふまえて、カマド 122 とカマド 116 の構築方法を復元したいと思います（図２）。

カマド 122 は、まずカマドの中央部を掘りくぼめ、煮炊きに用いる土器の支柱となる土師器高杯を逆さに埋めます。その後、焼土を混ぜた土でカマドの床面をつくります。袖部は、地面に板状石材を突き刺して芯材とし、それに粘土を巻き付けて積み上げます。天井部は２個体の土師器長胴甕を組み合わせて粘土を巻き付けて支えとします。これらの甕は出土時には土圧で割れており、内部に土は詰まっておらず、空洞のまま埋め込まれたと考えられます。

カマド 116 は、カマドとする部分を全体的に浅く掘り下げ、さらに中央部を掘りくぼめて支柱となる棒状の砂岩を立てて埋めます。焼土を混ぜた土で床面をつくり、支柱の石に土師器甕を被せます。東側袖部は地面に板状石材を突き刺し、西側袖部は土師器長胴甕の下半部を埋めて芯材とし、粘土を巻き付けて積み上げます。こちらの甕はカマドの基底部となる部分に用いられており、重量が必要なため内部に土が固く詰められていました。

土器転用の意味　以上のように、土師器長胴甕や板状石材を芯材に用いることによって、構築作業を省力化するとともに、カマドの規模を大きくすることができたと考えられます。さらにカマド 122 は、内部が空洞の土師器長胴甕を天井に埋め込むことで、天井部分を軽くし、崩落を防ぐ効果が得られたと推測されます。また、カマド使用時に直接火が当たる支柱には熱に強い砂岩を用い、直接火が当たらない芯材には熱には弱いが板状に加工しやすいホルンフェルスを用いるという石材の使い分けも行なわれており、高度な知識と技術により構築されたカマドであるといえます。今回紹介した２基の土器転用カマドがつくられたのは、一緒に出土した土器の年代からみて６世紀前葉から中葉と考えられます。京都盆地へのカマドの導入から１世紀あまりを経て、カマドの構築技術が一定の水準に達した段階のものといえるのではないでしょうか。

（柏田 有香）

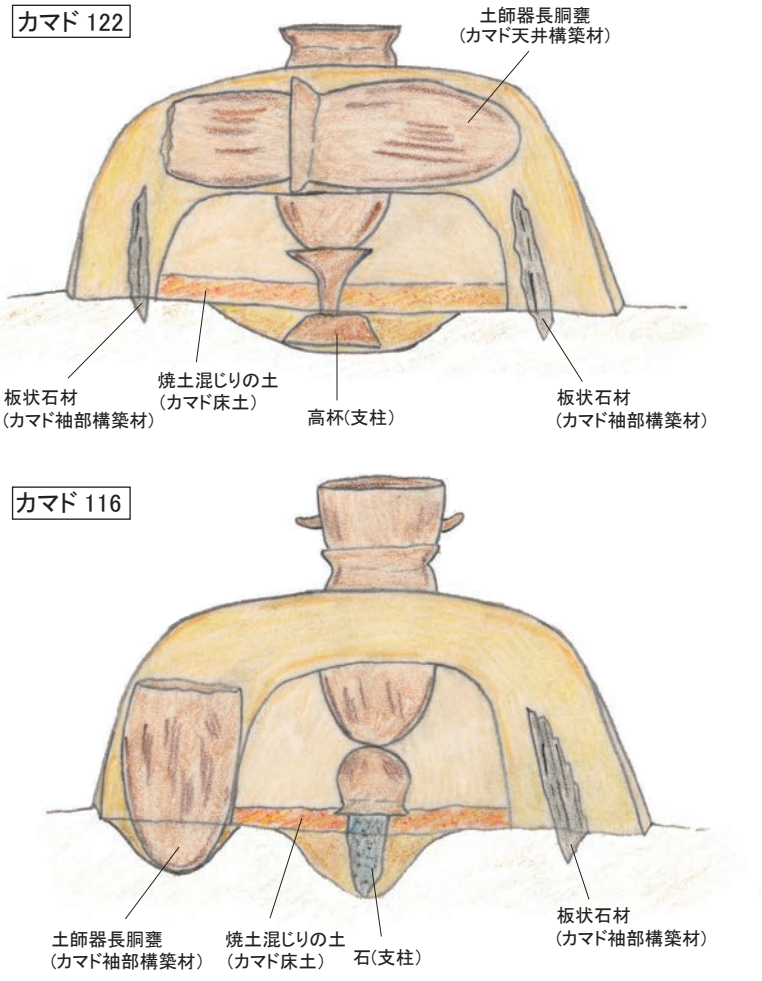

図２　カマド 122・116 復元模式図